

芭蕉

西行の死から五百年の後
芭蕉は西行の面影を抱きながらその足跡をたどります。
行く先々、折に付けて、彼の心を去来したものとは

伊勢の国魂を求めて・・・

師・折口信夫から受けた学問のあり方でしょうが、私には時代が古代に遡れば遡るほど身近な感じを持ち、歴史を下ってくると人の心が散漫になってとらえにくくなり、近代から現代に掛けてはどうにもならない時代だという気がします。もちろん、私も現代に生きている一人なので、現代を軽んじているわけではないのですが、日本人は近代に入ってからヨーロッパの近代に近付き、取り込もうと急ぎすぎた気がします。

日本人は、自分たちの宗教をこまやかに教義化し宗教儀礼として築きあげるに至らなかった時代に、すばらしく緻密な教典・教義・宗教儀礼・芸能を持つ仏教に出会いました。法隆寺に残る伎楽面や仏像、今残ってはいませんが、当時狭い飛鳥の地に塔を中心とした寺院建築が雨後の筍のように建てられたことを考えても、日本人がどれほど外来の宗教に胸を躍らせたかが分かり、古代人の仏教に対する憧れと情熱が伝わってきます。

更に仏教渡来以前の日本人の固有信仰を考えますと、心が痛々しくなるほど胸打たれるのです。折口は「仏教が渡来して初めて日本人は高い宗教的な自覚を持ったのだけれど、そしてそれは幸福なことであったけれども、しかし、もし仏教が入ってこなかったならば、その歩みは遅々としてはいただろうが、日本人が自らの心と体で自分たちの宗教を生み育てただろう。それが遂げられなかったのが残念だ」と思っていました。おそらくは本居宣長などもそのように思っていた日本人の一人でしょう。しかし、現実にはそのようにはならなかったし、仏教が日本人の宗教的な意識をこまやかに高めてくれたのも事実です。そういう日本人の長い宗教的な心の遍歴を考えますと、古代に日本で生まれた魂の信仰から、仏教が伝来して、本地垂迹説が広まるという思想の流れがあり、日本の伝統の中での宗教観は非常に柔軟で包容力があります。

西行は大変日本的な心を持っており、それを和歌の上に歌い上げた人です。西行の思想は本地垂迹説のなかにありました。それは歌にも表れています。芭蕉の活動は西行から五百年の時を経ています。芭蕉の文学を考えると、常に西行がその根底にあり、芭蕉の俳諧の作品や紀行文にそれが如実に表れています。芭蕉は、西行が旅した場所を、同じような心で訪れ、西行が和歌に表現したものを俳諧で表しているのです。伊勢の国魂を求めて旅をしてきた人々の心の脈絡は、時代による大きな変化を内包しながら、変わらない中心は芭蕉の時代まできっちりとつながっているとします。

俳句と連歌

現在の俳句は五・七・五で終わっていますが、本来の俳諧はそうではありませんでした。私は物心ついて以来七十年という歳月を延々と和歌を作り続け、また研究の対象の中心に据えてもいる者ですが、俳諧にもまた若い頃から縁があり、折口信夫の家で先生や兄弟子たちとよく連句を巻きました。連句は一人が五・七・五と発句を出し、次の者が七・七と付け、その後同じ形で続けていきます。これはふさわしい仲間、三～五人くらいするのが望ましく、力量に大きな差があると長く連句を巻くには楽しくなくなるのです。この連句を芭蕉は俳諧と言っているのです。

連句という形は、もしかすると短歌よりも古い形なのかもしれません。万葉集の第一期くらいに、和歌は五音と七音に整理されてきます。和歌は本来、相聞往来するものでした。五・七・五で呼びかけ、七・七で即座に返す単連歌が連歌の初期の形です。短歌と同じ形にみえますが内容が違います。短歌は上の句と下の句が一続きですが、連歌では問うものと答えるものなのです。前の句を受け止めていなければならぬけれど、内容は一步、一步と変わります。

平安朝初期にはその形が少し長くなり、第三句が付くようになります。三番目の句が付くことになると、それをきっかけにしてにわかに連歌が文芸化しはじめ、平安朝の終わりから中世の始めの頃になると、五十句、百句と連ねるようになっていきます。連歌というものが短歌よりも後の平安時代に起こってきたという考え方は、正しい文学史的な視野ではないと思うのです。短歌以前に、すでに連歌的な要素があるのです。

平安朝は連歌といいましたが、中世には、歌人たちがオーソドックスな形で作る連歌に対して、庶民がおもしろみや猥雑なことを取り込んで楽しんだ連句（俳諧）がおこりました。芸術が新たな情熱を得て変わろうとするとき、流行するときにはそのようなことが多いのですが、初期の俳諧は非常に平易で猥雑でした。猥雑というよりもむしろ卑猥で下品なものでした。そういうものが一般におもしろがられたのです。芭蕉はその俳諧を非常に重んじた人です。自分の風雅の本領は発句にあるのではなく俳諧にあるのだと自分でもはっきりと言っています。発句とは「発端の句」ですが、そこからはじまり、長句、短句、長句、短句……と一番短いものでも三十六、長くなれば百というような数まで続けます。その中で発句は独立性を持っており、同時にその後に連綿と連なるたくさんの句を率いる印象の強い句であるもので、やがてそれだけを取り出して楽しむようになり、現在の俳句となります。芭蕉にしても蕪村にしても連句を自分の文学の本領として重んじました。俳句を作る者が連句をほとんど作らなくなったのは正岡子規からの影響です。

芭蕉と西行

芭蕉は、日本の文学史の上で、非常に大きい大事な見通しを、自分の作風の上に示していった人です。そして西行の心にいつも万葉以来の歌人たちがあったように、いつでも芭蕉の心には西行がありました。もちろん西行以前の歌人のこともありましたが、西行に対する心の熱さ、理解の深さ、そしてそれを自分の俳諧の上に示していく見事さというのは、比類がないのです。それは文学を抽象化してしまわないための焦点であると思います。観念的に感じられる近代の傾向とは大きく違い、自分たちの根生いの心とつなげた形で、自分たちの文学を深くそして未永く生かしていく力が、そこからは出ているのです。西行の和歌と芭蕉の発句の形とは、当然、大きく違うのですが、心の有り様としては一貫したものが脈々と流れています。

『奥の細道』の旅は西行が亡くなってからちょうど五百年目に行われています。芭蕉にとっては追悼の思いがあったでしょう。その四年ほど前に『野ざらし紀行』で、さらにその三年後に『笈の小文』の旅でも芭蕉は伊勢に来ています。それらの紀行文や俳諧の中で、伊勢に来ては伊勢での西行が、吉野では吉野の西行が、旅の折々に色濃く表れています。そしてそれは模倣ではなく、芭蕉の心の中に生きている西行であり、それを芭蕉の文学の形で表現しています。心はずっと脈絡を持っている。しかし、現れ方は新鮮であり、また伝統をふまえてもいるのです。これは文学にとっては大事なことです。日本だけでなく、ヨーロッパの文学や絵画や音楽を知る上でも同じことですが、われわれはそれらを翻訳文体で抽象的に受け止めたでしょう。そしていきなりヨーロッパの近代を模倣して築こうとしたことが我々の近代をどれほどいびつにしたか、我々は今、反省させられているのです。西行と芭蕉、更に西行と古典とのつながりを考えながら、伊勢での芭蕉の句を追ってみたいと思います。

『野ざらし紀行』

『野ざらし紀行』は貞享元年、芭蕉四十一歳のときに行われた旅とその紀行文です。大井川を越えて伊勢に至ります。

松葉や風瀑が伊勢に有けるを尋音信て、十日ばかり足をとどむ。
暮て外宮に詣侍りけるに、一の鳥井の陰ほのくらく、御燈々に見えて、
また上もなき峯の松風身にしむばかり、ふかき心を起こして

みそか月無し千とせの杉を抱あらし

腰間に寸鉄を不帯、襟に一囊を懸て、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、
俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、亡き者は浮屠の属にたくへて、
神前に入をゆるさず。

松葉や風瀑は伊勢の俳人です。彼らを尋ねて芭蕉は伊勢を訪れたのです。まず外宮に参り、ついで内宮に参拝する昔からのしきたりに倣っています。「また上もなき峯の松風」は「深く入りて神路の奥を尋ぬればまたうへもなき峯の松風」という西行の伊勢での歌を引いているのです。「神路山の奥深くを訪れると峰の松風が何とも神々しく聞こえてくる」という歌で、この歌の奥には神仏習合の本地垂迹の思想があり、インドから渡ってこられた仏さまの垂迹の姿としての天照大神を、西行は二重写しに心に持っているのです。それを芭蕉は引き歌にして文章の中に取り込んでいます。引き歌とは歌の一句などを取り込んで背景のようにして感じさせる手法で、本歌取りと似た技法です。

外宮の幽暗な雰囲気の中に松風が吹いて、芭蕉の中に深い心の感動がおこったのです。「月のない三十日の夜の空。その空にそびえている千歳の杉を山の奥の方から吹き下ろしてくる風が、まるで抱きかかえているように吹いている」。山から吹き下ろしてくる風が嵐で、現在の台風という感じとは違います。三十日の夜に厳然としてそびえている黒い鉾杉、その杉木立を抱くようにして神路山から吹き下ろしてくる山風　良い句ですね。

芭蕉は僧侶ではないけれど僧形をしていました。宇治橋の所に今も僧侶遙拝所というものの名残が残っていますが、昔はもとどりのない者はあの場所より入ることが許されなかったのです。西行も同じようなことを書いていますが、決して本当に中に入れなかったわけではなく、神域深く入ったときの感動の歌を残しています。遙拝しただけではないのですが、まずは僧形の自分を入れてもらえないはずであると書くのです。仏教、神道などのあり方については長い歴史があり、奈良朝以来仏教は非常に重んじられるのですが、伊勢神宮は皇室の最高の魂を祀っておられるところですから一般とは事情が違って、僧形の者は入れないという建前があったのです。

西行谷のふもとに流あり。をんななどもの芋あらふをみるに

いもあらふ女西行ならば歌よまん

その後、芭蕉は西行谷を訪れました。西行谷では村の女たちが流れで芋を洗っている。おそらくこの時、芭蕉の心に連想されたのは西行が江口の遊女を見て歌を詠んだことでしょう。われわ

れは遊女という郭や色町に隔離された、あるいは後世の色をひさぐだけの女性を思いますけれど、『万葉集』にも「遊行女婦」と書かれる女性がしばしば国司や太宰師の催す宴会に出て歌を詠んでいます。中古や中世になっても、遊女というのは遊芸のほかに宗教性を持った存在でもあったのです。芭蕉の時代にはそれは薄らいでいますが、遊女にはそれぞれの宿場の要所にいて男性の心を喜ばせ、男性の情熱の根元になる刺激を与える女性であるという面影がまだあるのです。この遊女に対しての思い、これが『奥の細道』の中の「ひとつ家に遊女も寝たり萩と月」という句になるのです。同行した楚良の旅日記を見るとこれは事実ではなく、芭蕉のフィクションです。しかし、彼の中にある日本文学の伝統の、その精粋がここにあらわれています。紀貫之の『土佐日記』以来、文学者の日記が本当の日々の記述であるわけではなく、文学者ともあろうものが自分の行動をありのままにしか書かないなんて怠慢なことはいわゆる私もときに依頼されて旅の日記などを書きますが、無味乾燥な現実の羅列をしてもあまり意味はないわけで、こうありたかったという、より真率な心の中に起こったことを書くことが大事なのです。自分の心の大きな動きを描くことが文学の本意です。

この句は「芋を洗う女がいる。西行であったら、ここで一つ歌を読むはずだ」という意味です。『奥の細道』の中に有名な「田一枚植えて立ち去る柳かな」があります。この句は西行の「道の辺に清水流れる柳かげしばしとてこそたちどまりつれ」という短歌をもとにしています。炎天の陸奥を西行は歩いてきた。その道の辺に、清水が流れ、影を落としている柳がある。出家した身であって一生一つのものに心を託してはいけないのだということは分かっているけれど、この清水の涼しさ柳の影の優しさに、しばらくと思って立ち止まった。「しばしとてこそたちどまりつれ」と「こそ～已然形」で結ばれていますが、この已然形の結びは完全に結ばれてはならず、「しばらくと思ったけれどついつい長居をしてしまったなあ」という含みを持っています。この歌を心に持って、芭蕉は、村の早乙女が苗を田一枚植え終わった、そこまで見届けてやっと柳を立ち去るのです。西行の影響を深く受けながら、その歌を見事な形で自分の俳諧の一句にしているのです。こういうところに西行と芭蕉の心の響き合いを感じます。「芋洗う」の句の場合でも西行であったならば歌をよむであろう、と句にしたのです。そこには同時に、自分には俳諧がある、という自負の心もあるのです。

其日のかへさ、ある茶店に立よりけるに、てふといひけるおんな、
「あが名に発句せよ」といひて、白き絹出しけるに書き付け侍る

蘭の香や蝶の にたきものす

その日の帰り道、ある茶店に立ち寄った。そこにおちょうさんというなかなかの美女がいて、「私の名を詠み込んで発句を作ってくださいな」と言ったのです。そう言って白い絹を出してこれに書いてくださいとねだったのです。このころ、芭蕉は四十代に入っています。人から翁と呼ばれ、自分でもそういうつもりでいますが、出家の身であろうと、翁であろうと、美しい女性に対しては優しいのです。これは文学の伝統の上でも大切なことで、女性の力に対して心の中に高い評価を持っているのです。武家の時代のように男性の力だけが表に出て威張っているのではなく、本来の日本の文化は女性の力を認める要素が大きいのです。そこで、おちょうさんがたきしめていた蘭の香りを詠みこんで「蝶の羽のような美しい着物に、蘭の香りがたきしめられている」という見事な即興の句になっています。

この旅ではこの後故郷を訪ねて、親を偲び故郷を思い、伊賀の国の歌が読まれ、その後芭蕉は大和に向かいます。

四十四歳の早春に
芭蕉は最愛の弟子・杜国を伴って伊勢を旅します。
五度目に訪れたこの地で芭蕉の胸を去来したものは

杖衝坂の落馬

貞享四年、四十四歳の芭蕉は『笈の小文』に書かれた旅に出ます。東海道を上り、伊勢国に入ってから記述は今の四日市の近くにある杖衝坂のエピソードから始まっています。この坂はゆるやかになっていますが今もあり、昔は名の通り杖が必要な急な坂だったのでしょうか。坂の名は倭建命の伝説によるもので、大正年間に作られた「日本武尊御血塚」という生々しい碑が残っています。

「桑名よりくはで来ぬれば」といふ日永の里より、馬かりて杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。

徒歩ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまりいひ出侍れ共、終に季ことば入らず。

(『笈の小文』)

俳諧化による滑稽・洒脱をもって作品が成されているので表面には出てきませんが、このときの芭蕉の心の中には倭建があります。徒歩で越えるのならば倭建もそうであったように杖をつかなければならない坂だけけれど、なまじに馬で越えたために途中で落馬したというのです。『笈日記』などにも同じ場所での文があり、物寂しい一人旅である上に「とんでもない乗り手だ」と馬子に叱られながらこの句を詠んだと、なさけない様子を滑稽に描いています。

杜国と芭蕉

故郷の伊賀で正月を過ごした後、芭蕉は伊勢に向かいます。この旅には芭蕉にとってうれしい期待があります。芭蕉が大変愛した才能豊かな年若い弟子・杜国が来るのです。杜国は尾張の富裕な米穀商で、米の空売りをしたとして一時期三河に流されていました。この前年、芭蕉は流刑地へ杜国を訪ね、「鷹ひとつみつけてうれし伊良子崎」という句を詠んでいます。詠まれているのは鷹ですが、杜国に会えた喜びを表した句なのは明らかです。このとき、二人は春になったら伊勢で落ち合って一緒に吉野に行こうと約束をし、「吉野にて桜見せふぞ檜の木笠」という句を芭蕉が作り、杜国がそれにあわせて「吉野にて我も見せふぞ檜の木笠」と詠みました。また、一緒に旅をしたときの芭蕉の絵に「杜国いびきの図」というのがあり、隣に寝ている杜国のいびきが次第に大きくなっていく様子を描いています。二人の間には、師弟の関係を越えたホモセクシャルな関係があっただろうというのが、多くの研究者の見解です。私もそう感じますし、そういう感情を知っていた芭蕉である方が、その文学により幅と深みを感じます。

伊勢での句

杜国を伴った芭蕉が伊勢に来て作ったのが有名な次の句です。

伊勢山田

何の木の花とは知らず句哉

(『笈の小文』)

この句の奥にあるのは西行の「何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるる」の歌です。実はこの歌は西行の実作とするにはより所に疑問のある歌です。西行が亡くなってまもなくのあらゆる歌集にこの歌はなく、江戸時代中期に流行り始める木版刷りの本の、しかも最初は奥書の中に不意に現れるのです。大変分かりやすい歌ですが、この歌には民衆におもねる平俗さがあり、西行の歌はもっと優れてすさまじいものです。西行の魂がこのことを知ったら苦い顔をすると思いますが、これはおそらく後世の人々が西行に仮託した歌で、庶民の代表的な思いの表現として、芭蕉の時代には一般に流布していたのです。芭蕉は俳諧の文学者ですから、世俗の人々の受け止め方を大事に考えたでしょう。そして、その歌の心を慕っているのです。特に下の句が芭蕉の心を動かしたらしく、『花はさくら』『枇杷園随筆』にも同じ場面の文があります。

貞享五とせ如月の末、伊勢に詣づ。此御前の土を踏むこと五度に及び侍りぬ。更にとしのひとつも老行ままに、かしこきおほんひかりもたふとさも、猶思ひまされる心地して、彼西行のかたじけなさとよみけん、なみだの後もなつかしければ、扇うちしき砂にかしらかたづけながら

何の木の花とは知らず句ひ哉

(『花はさくら』『枇杷園随筆』)

伊勢に来るのは五度目だとあります。「かたじけなさに涙こぼるる」という涙の跡さえありがたい心地がするので、携えていた扇を砂の上に広げ、その上に額を付けてひたすら神を念じてこの句を詠んだというのです。

小学校に入った頃から国のために死ぬと教えられて育ち、戦時中は爆弾を抱えて戦車に飛び込む訓練ばかりさせられていた私は、敗戦の直後、残務整理を終えて郷里に帰ったものの、世間のあり方に腹が立ち、苦しんで、伊勢から熊野へとさすらいしました。最初に訪れたのが神宮です。ここには何かがあるだろうと思いましたが、敗戦には何のかかわりもないかのようにただ静かでした。芭蕉のまねをしたわけではありませんが、しばらく神前に跪いてじっと念じていたところ、神宮を守るために残されていた軍服の下士官が将校に立ち去るように言われ、そのときの思いを後に

「戦いに敗れしのちに漂泊きてこの白砂に涙おとしき」と詠みました。その後、志摩や熊野で言葉は荒々しいが優しい心を持った漁師さんらに出会い、人の温かさを感じて人間性を取り戻すことができましたのです。半月ほどのさすらいの旅でしたけれど、旅は人に、心の洗われる時と場を与えてくれるものです。

裸にはまだ衣更着の嵐哉

(『笈の小文』)

二月の中頃のことです。これは増賀上人が伊勢に参詣して、神のお告げがあったために、お告げに従って着ているものを脱いで乞食に与え、裸で帰ったという故事をふまえて詠んでいます。西行ではありませんが、先の時代の優れた僧侶の逸話を本歌に据えて詠んでいるのです。

菩提山

此山のかなしさ告げよ野老掘

(『笈の小文』)

菩提山は伊勢の宮川の人たちのお墓のある菩提山神宮寺を訪ねての句です。野老というのはヤマノイモ、あるいはその原種を言います。墓所である場所と山芋を掘るという山人の暮らしをうまく詠んでいます。

龍尚舎

物の名を先とふ芦のわか葉哉

(『笈の小文』)

この句は「浪速の芦は伊勢の浜荻」という『菟玖波集』などにある古歌を心に持っています。伊勢では芦を浜荻と呼んだのです。それをふまえて「ここではこれをなんと呼びますかとまず尋ねる芦の若葉であることだ」と、同じものでも所によって名が変わるのを滑稽化している。これが俳諧というものです。

網代民部雪堂に合

梅の木に猶やどり木や梅の花

(『笈の小文』)

宿り木は二月ごろ黄金色の細かな花を付けます。梅の花が咲いている。そしてその木に宿っている宿り木もまた花を咲かせているのです。宿り木は『万葉集』にあるように古代から祝賀の宴でかんざしにして祝福の歌を詠い舞を舞うなどに使われました。ヨーロッパでもクリスマスの飾りなどに使い神聖視しています、それは冬枯れの中で、木の梢に緑の魂のシンボルのような形をかかげているからで、そこに木の生命力が宿っているんだと考えられたのです。

神垣のうちに梅一木もなし。いかなる故有事にやと、神司などに尋侍れば、只なんとはなし、をのづから梅一もともなくて、子良の館の後に一もと侍るよしをかたりつたふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

(『笈の小文』)

親しみのある明るい句です。外宮の神域に梅の木が一本もないのはどういうわけかと神主に聞くと、格別の理由はなく、ただなんとなくそうなったんだと言う。そして神に仕える年若い乙女である子等の館の後ろにたった一本あるのが非常にゆかしいというのです。

神垣やおもひもかけずねはんぞう

(『笈の小文』)

「神域の中に思いもかけないお釈迦様の涅槃の像が掛けられている」という句です。二月十五日の涅槃会には、神主さんたちも涅槃像を拝んでいたのです。廃仏毀釈などという極端な行動がおこる以前の神仏習合の時代です。

如月を杜国とともに伊勢で過ごした芭蕉は、やがて杜国を連れて吉野へ向かいます。芭蕉にとって楽しい旅であったことが句の中にもよく表れています。

連句の楽しみ

芭蕉は連句に自己の文学の主眼を置きました。連歌には大変煩雑な約束ごと(式目)がありましたが、芭蕉はこれを簡単にし、三十六句の「歌仙」の形を大切にしました。「三十六句は三十六歩である」と言っています。つまり、一歩たりとも後ろへもどることはなく、同時に前の句と大きく離れてもいけないのです。芭蕉は伊勢を訪れた際にも、神主や御師たちと連句を巻いています。

何の木（勝延筆懐紙）

何の木の花とは知らず匂ひ哉	芭蕉翁
こ糸に朝日をふくむ鶯	益光
春ふかき柴の橋守雪掃きて	又玄
二葉の堇御幸待けり	平庵
有明の草紙をきぬに引包	勝延
寢覚はながき夜の油火	清里
釣柿に鼠のかよふ音聞て	光
しほりを戸ざす田の中の寺	翁
山路来て清水稀なる袖の汗	庵
煩ふ鷹をおしむかなしき	玄
女のみ古き御館の破れ簾	翁
暮に肘つきて涙落としつ	延
いねがてに酒さへならず物おもひ	の人
陣のかり屋に僧の籠もりて	光
白雲にのぼれと雁を放らし	光
はじめて得たる国の初宿	庵
もる月を賤しき母の窓に見て	玄
藍にしみ付く指かくすらん	翁

これは芭蕉が伊勢でまいた連句の前半の十八句です。芭蕉が門弟たちと創り上げた連句のようにすばらしいできればありませんが、たまたま来た芭蕉を招いての臨時の連衆としてはなかなか面白いものです。

まず、客人である芭蕉が発句を詠みます。発句は五・七・五の長句で内容は何を詠んでもよいのですが、そのときの季節を入れた句です。『笈の小文』にもある春の句が出されています。二番目は脇の句でこれは七・七の短句。第三句はここから動き出すわけですから、この句は主として「て」で止めて次の句を出しやすくします。「春ふかき」の柴の庵は金持ちの隠居所かなにかを想像しているのですね。四句目では、その家では天皇か上皇かの行幸を待っているというドラマティックな展開をみせ、それが次の句では草紙の中の物語になっています。この五句目の「有明」は月ですから、春の句が続いていたのが秋へと急展開してしまい、これは少し異例で間に雑の句か夏の句を入れて進むのが良いのです。芭蕉も門弟ならば叱るでしょうが、ここでは大目に見たのでしょう。表六句が終わって次の句では田舎の風情に引き戻しています。こうして連想が展開し、内容が面白くなっていきます。十三句目の“の人”とあるのは杜国で、杜国は若いながら芭蕉の門下でも有数の連句の名手で、後に芭蕉と二人で連句を巻いたりもしています。

私は時折、作家の丸谷才一さん、詩人の大岡信さんと三人で連句を巻きますが、三者三様で楽しいものです。和歌や俳句を楽しまれる方には、仲間を誘って連句を巻くことをお勧めします。若干の勉強は必要ですが、ゲームなどよりもずっと面白いものです。連句は短歌よりも古い時代からはじまって、時代ごとに形を変えながら、その心はずっと生きて脈々と近世まで生きてきたのです。近世になり急激に入ってきたヨーロッパ文明の影響によって大きく和歌は変貌をとげましたが、それでもその奥に流れる思いは生きています。それを後の時代に伝え、再び息づかせるために、我々は今生きている時代に精一杯自分達の文学伝統を学び伝えて行かなければならないと思います。